

まえがき

小林 光一郎

本書は、アチック・ミュージアム（以下、アチック）並びにその主催者であった渋沢敬三（以下、敬三）の調査活動や、それによって得られた諸資料および「アチック同人」としてまとめられるアチックに関する研究の関係者に関する情報の追加・補充・蓄積など、アチックの実態の追求を主眼とした基礎研究を行うことを目標とし、「アチック・ミュージアムの調査活動に関する基礎研究「隠岐」調査の検証・分析と民俗学的考察」として2015年度より2ヵ年間にわたり調査・研究を行った研究成果報告書である。

本研究以前におけるアチックについての研究史としては、2013年度に敬三没後50年を記念して行われた「渋沢敬三記念事業」に関連した諸々の研究活動においてある一定の成果が出たといえる情勢にはある。しかし、その後の現状において、その研究活動の成果や新たな課題点などが引き続き行われているとはいえない状況である。上記で「ある一定の成果」と述べたことも、この成果は飽く迄、敬三没後50年に合わせた成果であり、言い換えれば2013年に間に合わせた検証・研究であって、その多くが引き続きの検証を要する、あるいは課題を次の研究に残すというかたちで終わっていたのがその実情であった⁽¹⁾。このような状況を鑑みることはもちろん、これらアチックの調査・研究の検証が、民俗学や民具研究、漁業史研究などといった研究史としても急務である点においても、「ある一定の成果」からの進展が必要である。

以上のような現状を踏まえ本研究においては以下の目的に則り調査・研究を行った。まず、アチックで行われた調査を研究単位とし、調査がどのような理由で、どのような方法で、どのような結果だったのかという、経緯や実態の解明を目的とし、さらに、アチック内への結果的な影響、その後のアチック同人たちの研究に与えた影響などの研究史的考察、調査対象地である隠岐における調査当時の状況から現在における経年変化の記録化、調査当時と現行の民俗事象の考察など、隠岐やその周辺地域の領域における民俗をも視野に研究を行うことを目指した。また、敬三の「論文を書くのではない。資料を学界に提供するのである。山から鉱石を掘りだし、之を選鉱して品位を高め焼いて鍔（注、かん）を取り去って粗銅とするのが本書の目的である。（中略）原文書を整理して他日学者の用に供し得る形にすることが自分の目的なのである」〔渋沢 1937 18〕の精神にならい、本研究によって集約した「隠岐調査」（後述）に関する資料や情報の提示・開示もその目標とした。

そのため本書は、アチックの隠岐調査に関する写真や映像・民具といった関連資料を網羅した総合的な資料編と、本研究において判明した結果に基づく論文編という体裁でまとめられている。

資料編・論考編の双方ともに共通する事項として、具体的な研究対象は、昭和9年5月に敬三はじめアチック同人とされる研究者によって行われた「隠岐調査（第一次）」と、昭和10年8月に桜田勝徳や山口和雄、岩倉市郎によって行われた「隠岐調査（第二次）」を基本とし、研究対象地域としては、隠岐ならびに上記の調査に関連した鳥取県境港や島根県の島根半島の一部も含むものとした（以後、それぞれの調査を個別に表す場合はその旨を表記し、第一次・第二次調査を差す場合は「隠

岐調査』)。研究方法は、各研究機関に引き継がれたアチックに関する諸資料、なかでも既に2012年に神奈川大学日本常民文化研究所（以下、常民研）から刊行された『アチック写真 vol. 6』を基本的な資料の原典とし、情報の更新と内容の補填・充実を目指した。具体的な研究対象資料としては常民研所蔵資料（アチック写真やアチック・フィルム、彙報、研究ノート等）や宮本記念財団所蔵資料（写真資料や映像資料、宮本馨太郎メモ等）、国立民族学博物館所蔵資料（以下、民博。アチック時代に収集された民具資料等）、渋沢史料館所蔵資料（敬三の手帖や映像資料等）、慶應義塾大学文学部古文書室所蔵櫻田勝徳資料（櫻田勝徳未刊行ノート）⁽²⁾などを基に調査の検証・分析を行い、上記、研究対象地域において現地調査も行った。

基本的には班員すべてが調査・研究等に関与したが、本書作成にあたっては執筆担当を割り当てた。本書各章に於いて凡例・解題等の説明があるが、以下、本書の各章における概要と方法について述べる。

アチック写真の情報の更新と内容の補填・充実に関しては、羽毛田と小林が担当し、既に刊行された『アチック写真 vol. 6』を基に調査地である隠岐に於いて補填情報などを収集することが出来た写真資料に対しその情報を追加している⁽³⁾。宮本馨太郎調査ノート翻刻・解題に関しては、永井が担当し、当該資料の写真も掲載した。民博所蔵民具データ集・解題に関しては、木村が担当し、民博資料データベースから当該資料を抽出し、本研究において分かった事項や調査隠岐調査関連資料などから情報の補填・追加等を行った⁽⁴⁾。隠岐関係動画詳細に関しては、小林と永井が担当し、本書で取り上げた動画のタイムカウントやカット別内容の一覧を小林が作成し⁽⁵⁾、常民研所蔵動画・宮本記念財団所蔵動画については小林が解題を、渋沢史料館所蔵動画については永井が解題を執筆した⁽⁶⁾。櫻田勝徳資料翻刻・解題に関しては、羽毛田、永井、小林が担当し、当該資料の写真も掲載した⁽⁷⁾。また、これら諸資料以外に本研究の成果として、樫村と小林が論考をまとめている。

本研究における資料編・論考編に共通することであるが、これらはこれで完成をした訳ではないということである。それは調査期間という時間的制約や残存資料の限界、予算といった本書編集上の問題などの、数多くの課題があったからだけではない。研究史の観点から言えば、本研究は隠岐調査に焦点を絞った研究を行ったが、隠岐調査以外にもアチックにおける調査は数多くあり、隠岐調査とは総合的なアチックの研究史の中のただの一点でしかない。また、隠岐調査という個別的な事例研究の深化の度合いとしても、それは微々たるものかもしれない。しかし、本研究は現在出来得る限りの最善の研究を行った結果であり、且つ、次の研究の土台となる成果であって、今後、更なる資料の追加や補填等を繰り返すことでより向上する「資料」としての成果である。研究方法などにおいてはまだまだ不備があるとしても、このような研究を進め「資料」としての成果を蓄積することで、アチックの研究史の総合的な考察が行える日が来るであろう。本研究の成果が筆者自身の研究をはじめ班員の研究につながることはもちろん、他の研究にも活かされることを望む次第である。

最後に、本研究にあたって、神奈川大学日本常民文化研究所、宮本記念財団、国立民族学博物館、渋沢史料館、慶應義塾大学文学部古文書室の各資料所蔵機関のご理解をいただきここに掲載することが出来た。また、本書は、隠岐において直接話を伺った安達和郎氏、焼火神社神主である松浦道仁氏、三度地域の皆様、隠岐の島町教育委員会、西ノ島町教育委員会、隠岐の「牛突き」習俗を語る会等の皆様をはじめ、数多くの方の御厚意とご理解の下に出来上がった成果である。関係者各位にここに感謝を申し上げる。

注

- (1) 例えば、前者の場合は、筆者が関わった検証作業である、2010年～2015年において行われた「渋沢敬三記念事業」の内の公益財団法人渋沢栄一記念財団実業史研究情報センターにおける「敬三関連情報へのアクセス向上：(1) 渋沢敬三総合年譜の作成／(2) 収集資料群の把握／(3) 敬三紹介サイトの作成」業務などが渋沢史料館に引き継がれている。後者の場合は、筆者自身の研究に限っても次に課題を多く残したままであり、筆者以外に没後50年事業等に関わった人々も筆者と同様の状況のままだと考えられる。
- (2) 慶應義塾大学文学部古文書室所蔵資料である櫻田勝徳資料をさすときは「櫻田」の文字を使いそれ以外の場合は桜田を用いることにした。
- (3) 本書では追加情報がなかったアチック写真の資料については割愛している。そのため、『アチック写真 vol. 6』を共に御覧されたい。
- (4) なお、当初は本書において、民博で撮影された資料写真も掲載する予定であったが、本書刊行における紙幅・予算の関係上、断念した。資料画像については民博のwebサイトの資料データベースを参照されたい。
- (5) 各動画についてはいずれも各所蔵機関においてデジタル化されたデータがあり、これを基にWindows Media Playerにて再生、タイムカウントやカット数などを計測し数値化した。
- (6) なお、当初は本書において、動画資料の映像をカット単位で掲載する予定であったが、本書刊行における紙幅・予算の関係上、断念した。これについては別の機会に譲り映像における資料論的考察と共に資料紹介をすることを今後の課題としたい。
- (7) なお、当初は本書において、資料内の挿絵や図などのカットをズームアップした写真を別項目で掲載する予定であったが、本書刊行における紙幅・予算の関係上、断念し、ページ毎の写真をもって代えた。

参考文献

渋沢敬三編著 1937「本書成立の由来」『豆州内浦漁民史料 上巻』アチックミュージアム pp. 1-27